

2026年度
短期留学成果報告書

専攻 (楽器等名)	留学先	期間
声楽専攻・独唱研究領域	イタリア・シエナ・キジアーナ音楽院	8/26-9/1
1. 実施概要(具体的に)		
8/26-9/1 講習会受講 ・会場 Capella – Conservatorio “Franci” ・実施内容 声聴き、レッスン、修了コンサートリハーサル等 8/28 HANS WERNER HENZE 100コンサート、アンサンブル出演 ・会場 Palazzo Chigi Saracini ・演奏曲 Oratorio《Jephte》Plorate filii Israël : G. Carissimi 8/30 選抜受講生によるカフェでのミニコンサート出演(18:00-) ・会場 ChigianaArtCafé ・演奏曲 Opera《Giulio Cesare in Egitto》La giustizia ha già sull’ arco : G. F. Händel 9/1 修了コンサート出演 ・会場 Palazzo Chigi Saracini ・演奏曲 バロック声楽コースSara Mingardoクラスの受講生によるパスティツチョ(15分間)・・・Sara Mingardoによるパスティツチョ		
2. 留学を通じて自身が得た成果		
Sara Mingardoは世界的に有名なコントラルト歌手の1人で、バロック作品における大家と言われています。昨年2025年12月、新国立劇場の“Orfeo ed Euridice”のOrfeo役として来日しました。私はChigianaに一昨年、昨年と聴講生として参加しており、今回が初めての受講生としての参加です。今回5点に分けて成果を記述します。 1. バロック声楽曲における歌唱法、装飾法、ベルカントについて 発声法として、先生からはバロック時代、ベルカントを創設した作曲家や歌手達の正しいテクニックの使い方を学びました。私の場合は特にバロック時代のアジリタ(細かく早い音符の連なりを敏捷に、声を転がすように歌うテクニックのこと)の歌い方をご教授いただきました。「レガートになりすぎず、1音1音を叩くように」という指導を曲を使わず1時間ヴォカリーズで身につける作業を行ないました。その後、先生からこのテクニックを活用できる曲の課題を渡され、曲を通して演習を行なった。 2. レチタティーヴォの歌唱法 今回の講習会のメインの内容が「レチタティーヴォの歌唱法」であり、これまでにSara Mingardo先生のレッスンを何度か受講していたため、今回のレッスンでは技術をブラッシュアップをするような内容でした。レチタティーヴォはイタリア語を話すように歌うというものです。特に指導を受けた点は、休符を句点や間として扱うことでさらにレチタティーヴォを生き生きとしたものとするものであり、3曲ほどを取り扱い演習を何度も繰り返し行ないました。休符だから待たなければいけない、という従来の考え方をまず捨てるということが以前からではありますが大変難しいポイントでした。 3. Carissimiのアンサンブルについて Henzeのコンサートの最後にCarissimiのオラトリオ「Jephte」のフィナーレをバロック声楽コース2クラス合同で行いました。総勢20名程度、5パートでの合唱です。バロック期の合唱ということもあり、各パートでフーガのように折り重なり、模倣しあうという普段経験のできない経験をすることができました。Palazzo Chigi Saraciniのホール内バルコニーから歌い、さながら教会で歌うかのような残響を感じながらの演奏でした。 4. カフェコンサート、ソルフェージュについて 先生からその場で渡された曲を、その日の午後のレッスンに持って行くというソルフェージュ能力の大切さを実感しました。大学学部時代の授業などは決して無駄ではないと感じ、今後海外留学を考える方にはぜひ知っておいていただきたいと思っています。またその曲を次の日に急遽出演することになったカフェでのコンサートで歌うことができました。コンサートは曲を貰った次の日のお昼に、先生から「今日の夜、この曲でコンサートに出てみませんか？」とご提案いただき実現しました。突然出演を提案され臆せず「出ます」と言える能力も身につきました。今後、少なからずジャンプインが起こることは十分に想定できます。この経験を活かし、そこまでの準備を怠らぬように努力します。 5. 修了コンサートについて 修了コンサートではパスティツチョ(多種多様な作曲家のオペラアリア、重唱を組み合わせ1本の作品となるもの)を上演しました。本来オペラで歌われる場合とパスティツチョで歌う場合は、前のシーンの繋ぎのの違い、自身の役柄、その役柄の感情の違い、歌う対象などに様々な違いがあるため、曲を歌い分けが必要となります。普段はオペラの1場面としてその曲を歌い、演じることしかしないため、別の作品の場面となった場合を演じることが初めての経験でした。		
3. 反省点		
イタリア語で音楽関係の会話だけではなく、日常の会話をもっと活発に、尚且つ会話ができるイタリア語力をもう少し上げておくべきだったと思いました。個人の反省ではありませんが、ヨーロッパの国々から参加している学生は、先生の指導に対して自分の意見や感覚を先生に伝えていました。日本の生徒全員がそうであるかはわかりませんが、このような光景はあまり日本では見ないように感じます。先生に意見することが正しいか正しくないかは一度置いておき、このような光景を目の当たりにしたことは大変興味深いことでした。		
4. 今後の参加者に伝えたいこと(持ち物、事前学習等)		
完璧ではなくてもいいので、その土地の言語は必ず勉強して話せるようになることがとても大切です。今回私はイタリアでイタリア人の先生でしたが、彼女が英語でレッスンをすると伝えたいことを100%伝えられていないように見受けられました。反対にイタリア語だと次々とアドバイスを受けられ、さらに実りあるレッスンになると思います。また私たちは普段、イタリア語を多く歌う。日常生活からイタリア語を使うことで正しい発音、発語のポジションを身につけることができるようになります。レッスンやマスタークラスに行く際は、曲が歌える状態ではなく、1役でも役が歌える状態でレッスンを迎えることも大切です。そして巡ってきたチャンスを逃さないこと。絶対延長コードを現地で購入するとQOLが格段に上がります！		